

研究の棗

日本古建築研究の棗（第八回）

工學博士 天 沼 俊 一

第十七 手 狹

手狹タビサミとは、桁の上に極が直角に乗つた時、其出

會つたところを丈夫にする爲と、兼て工合よくそ

こを飾つて見せる爲めと、極と同一方向に普通桁

と相缺アヒカキ（Halving）に附た一種の裝飾である。大概

の場合に向拜柱上、主屋に面した方にのみ用ひら

れるが、稀には兩方面にあるものもある（第四十六圖の三、④）

手狭の下側は三斗又は實肘木、上側は極、一方の

側は桁について居り、一方即ち遊離してゐる方丈

けに線形があり、其兩側面にはいろいろの彫刻が

ついてゐるのである。鎌倉以前には向拜がなかつたために、手狹等を發明する必要がなかつた、だから鎌倉以前にはない。

鎌倉時代になつて建物に向拜が出来た、そこで向拜柱と主屋の柱との中心線が、正面と直角なる一直線上に在る時、双方の連絡を取るためには繫虹梁を用ふれば丈夫になる、併しかゝる場合には繫虹梁を用ひぬか、高さの關係で用ひられぬか、或は稀に此等が一直線上になくて、繫虹梁を用ひられぬ時には、向拜柱は主屋と全く遊離して建つてゐるから、前方又は後方から推された場合には、

倒れ勝ちで危い様に見える。夫れど、水平材と傾斜材との交會より出来る三角形の部分を、見場をよくする爲めと、この二つから略三角形をしたものを此所へ箆め込み、體裁をよくしたのである。
(第四十圖)、これが手狹發明の順序である。

故に前にも記した通り多くは向拜に丈け用ひてあるので、其他の場所に用ひた實例としては、今覺えてゐるのでは、近江葛川の地主神社本殿(第四十六圖)と高知市公園に昨年迄あつた熊野神社本殿(第四十六圖)とその他一二棟を擧げ得るのみである。前者に於いては向拜柱上(第四十圖)と本殿外陣内側とに用ひてある、向拜の方は誰れにも見えるが、神殿は寺の本堂と違ひ、さう無暗に人の入るを許さぬ所である、其上光線も不充分なるにも係らず、向拜のと同じ位叮嚀に彫刻が施してある。

廣島縣尾道市淨土寺本堂は、鎌倉時代即ち嘉曆二年の建築であるが、其向拜には最も簡単な手狹

がついてゐる、たゞ一寸した線形がついてゐる丈けで、全體には何の彫刻もない(第四十六圖)。此が今私の知つてゐる最古の手狹である。

初まりは斯様に簡單であつたが、此時代の末に近づくほどだん／＼彫刻がついて来る。大和國宇陀郡松山町に近い古市場の宇太水分神社(ウダミヅノ)は、一間社春日造の社殿が三殿並び、中殿の棟木に『元應二年二月二十三日上棟云云』の墨書があるが、中央の本殿は一番立派にするつもりか、其手狹は脇殿のに比して大に彫刻がしてある、第四十六圖⑤・⑥の例によると、内側には葡萄唐草を外側には藤を半肉に彫つてゐる、葡萄唐草をかゝる時代に用ひてゐるのが一寸面白い。同圖④は脇殿のであるが格を落してすつと簡單にして了つたのであらう。

④は有名な觀心寺本堂向拜ので、④が一轉するところになる、下の部分即ち斗から突出してゐる部分は、④・⑤・⑥全く同一で、夫れから上の部分に

移らうとする所で、③に於いてはタマが二つ出来かけ、上のタマから「茨」(イバラ) (Crest) を作つて輪廓が前方へ出て了つたが、④では上のタマから輪廓は逆に波線を描いて奥へ引込み、桁の上端近くに於いて消滅し、更にタマ及其附近から巻葉が二三枚出て、賑かな手狭を作つてゐる。これは③の様に充分に伸びてはゐず、折角伸びやうとするのを前から押へつけられた様ではあるが、兎に角③から④が出来たのは様式上否定は出来ぬ、一方年代から考へても④は建武元年の建築だから、③に比べて十五年晚い、十五年前に此の位の發達は當然であらう。

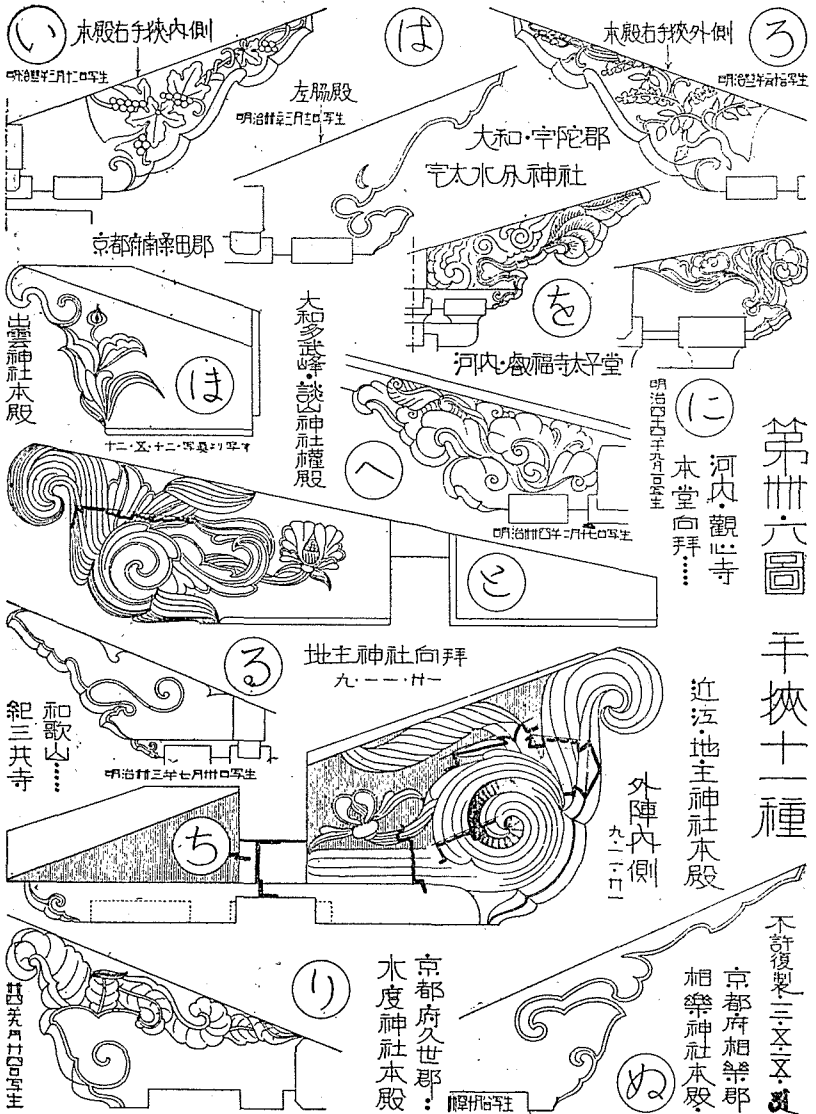
こゝで建武年間の建築たる建水分神社の手狭を紹介する、第四十六圖の二②に其立面と見上とが示してある、肘木も大に角張り先端は甚だ銳利であり、手狭も鎬が強く其一部が前の方に飛び出して鳥の嘴の様になり、鎬の間に孔があいてゐる、

希臘古建築の線形の Bird's Beak より此方が餘程眞に迫つてゐる、眞正の鳥嘴は我國の古建築に於いてみる事が出来るのである。此神社も宇太水分の様に三殿から成つてゐるが、彼が春日造三棟なるに、此は中央が春日造で左右が流造であるから既に様式が變つてゐるところへ、細部の手法が斯様であるから、部分々々を精細に觀察する時は大分に變つてゐるが、全體として格好も洵によく、類例稀な甚だ面白い建築である。

第四十六圖③は、貞和元年建立の出雲神社本殿のもの、此社は南桑田郡千歲村にある。此れは頗る簡單であるが、鬱金香の様な草花が淺く彫つてある丈で、忌味のない意匠である。以上鎌倉。

室町時代。次に此時代の數例について研究してみる。談山神社權殿の建立年代は未詳であるから⑤の年代も從て未詳であるが、室町でも餘り早いところではない、大分にあつちこつち亂離に渦卷

第卅六圖 平狹十一種



京都市 清水寺門向拜手挟

門に向拜がついてゐる
のは此門だけ珍らしいのである

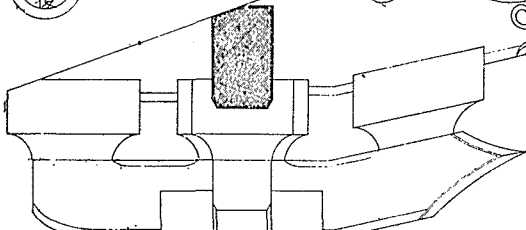
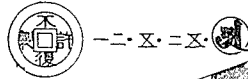


京都清水寺門向拜手挟より写す

廣徳縣尾道市 浄土寺平堂
向拜手挟
明治四十四年
十月十九日写真

わ

注意
わが随分古く
たが最も新しい。
嘉暦二年の浄土
寺本堂と、近戸末
期の手法とを差は圖に
於て明をあらわす。

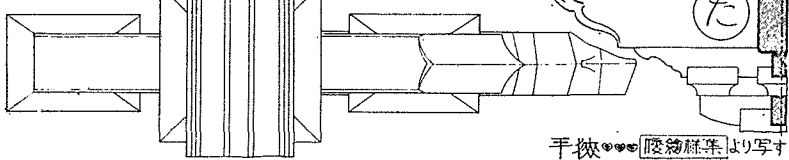


西條浄土寺本堂圖より写す

此圖は特に手挟比ぶる古い
形と最も新しい形とを一目して判
る様に作つたものである

第四十六圖之貳
手挟 四種

拜手挟
達木分神社左右殿向
赤阪村大字木分
大阪府南河内郡



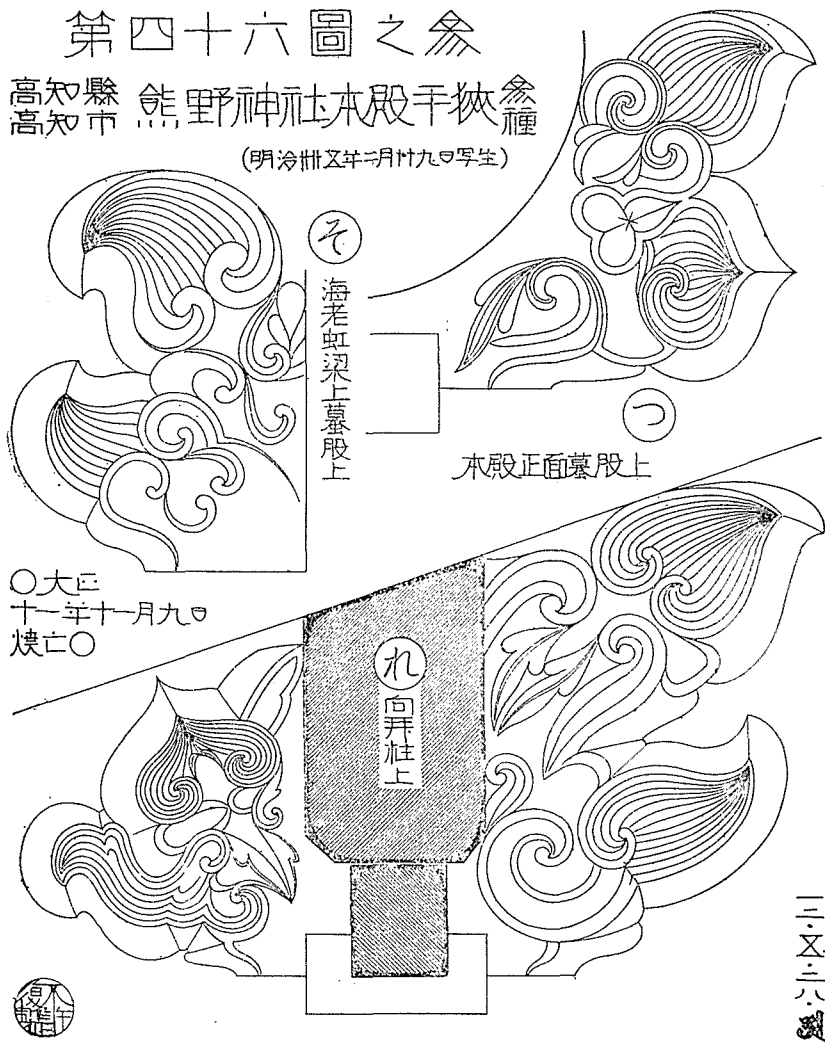
手挟 腰飾様より写す

た

第四十六圖之參

高知縣 高知市 熊野神社本殿手狹參種

(明治卅五年二月廿九日写生)



○大正
十一年十一月九日
焼亡○



三二八六

がついてゐて、全體としても統一なく、各葉は締りがなく、群雄割據といふ有様。

⑤・⑥は先に記した地主神社のもの、唐草に無理がなく、渦も適當の場所で適當に卷込み、甚だ傑作である、あんな淋しい、滅多に目明の行かぬところへ建て、おくのは勿體ない、殊に本殿前の一、二面の幣殿の唐破風や墓股や繪様肘木は稀にみる優秀な作である。同じ滋賀郡であるが和爾村大字和爾の道風神社及小野篁神社の手狹は、地主神社のと同式である、これも餘り人の行かぬところだが、和爾の船著場から近いから容易に行つてみる事が出来る。

⑦の水度神社は文安五年の建築、地主神社が文龜二年だから、丁度五十五年早い、だから此位の差は當然である。其輪廓を見ると、何處にか觀心寺のに似てゐるところがあるのが判るであらう。

⑧も年代未詳であるが早いところであらう、其

線形が鎌倉時代の夫れに似てゐる事を觀察し得るのである。どうして鎌倉時代の俣があるか不審ならば、第二十二圖の墓股の脚の線形を参照すると其然る所以が分るであらう。

桃山時代の三つ許り示しておく。⑨は俗名紀三井寺本名護國院本堂(う)の手狹である、私の備忘録に此圖其他本鼻二三が記してあつて、紀三井寺と許りで名が記してない、併し塔婆でも樓門でも鐘樓でもない事は確からしいから、本堂と思ふが、間違つてゐるかも知れぬ、も一度此寺へ行く機會があつたら必ず調べてくるから、夫れ迄は相濟まぬが？印をつけておく。此れは桃山時代の極く簡單で格好の餘りよくない例である。

⑩は河内上太子叡福寺向拜のもの、此建物は慶長八年で擬寶珠銘に明かである、彫刻も大分に多くなり可なり込み入つてゐるが、これ等はまだ少ない方で、此より二年早い慶長六年の建築である

大和の法華寺の向拜にあるの等は、到底こんな事ではない、ずつと込み入つてゐる。

京都市北野神社は、拜殿・樂之間・石之間及本殿を併せ、所謂八棟造で慶長十二年の建築であるが、其向拜には天人、迦陵頻伽、牡丹或に桐に極樂鳥等の籠彫手狹が用ひてある。時代が時代だから、彫刻を彫刻として批評するならば、何れも立派な作であるが、手狹としては面白くない。

④は清水寺西門ので、其面には雲水が一ぱいに彫刻してある、これも同じく慶長十二年のであるが、北野のに引かへ全體混亂してよく分らぬ模様である、墮落の傾向は此の場合にも既に充分に現れてゐる。

江戸時代になると、他の細部と同じで遂に救済すべからざる事になる。彫刻は少ないが一例は⑤にある、其形不快にして要領を得ず、上方と下方とにたい大少の差ある丈けの全く同性質の若葉を

以て飾つてある、此即同じ者の反覆 (Repetition) であつて、建築家の最も忌むところである、其輪廓の不思議な曲線は何に例へたらばいゝか、卑近な例であるが、ごろろ汗をこしらへる蓍蕈によく斯様な不得要領なのがある、蓍蕈を其まゝ手狹に應用はちと猛烈であらう。

漸く時代が降ると、墓股等と同じく本來の意義を失ひ、手狹も全く一つの裝飾になつて了つた。

先に記した北野神社の例もさうであるが、此の時代のいふと、日光大猷院拜殿向拜のは菊の籠彫で甚だ美事であるが、破損の虞があるから保護の爲め鐵輪で二個所巻いてある、これでは何の爲めの手狹か判らぬ。日光廟では此の他大猷院門前に並び建てる法華常行堂の内、法華堂向拜のが同じく透彫である。信濃善光寺本堂(寶永二)左右に附せる階隱の手狹も同様である。其他實例は多い。

* * * * *

最後に異形の手狭の實例を舉げて此項を終る事にする、夫れは第四十六圖の參㊶・㊷・㊸の三つである、初めに普通は主屋に面した方に丈けだけれども、稀に兩面に用ひてあるとかいた其稀れな場合の例で、全く珍らしいと思ふ。或は左程稀れではなく、私が寡聞の結果珍しがるのかも知れぬさうであるが甚だ恐縮するが、何れにしても餘り澤山はあるまいと考へてゐる。

夫れから向拜柱と本殿柱とを連絡せる海老虹梁上の臺股(第二十圖④)の上にもあるし(第四十六圖⑤)も一つ本殿正面柱間臺股の上にも、支輪間に木鼻といへば木鼻であるが、手狭とした方が都合のいゝ繪樣がついてゐる。

以上は何れも高知市公園にあつた無祿社熊野神社の細部で、一種の様式をなし意匠は頗る嶄新である。併し嶄新といふ丈けで、決して模範になる様な、そして推賞措く能はざる様な、そんな立派

なものではない、其上斯様なものは忘れても眞似をすべきでない。其の價値に於いて全く同日の論ではないが、いつかかかいた故京都府技師龜岡末吉氏創意の細部手法と同様で、同氏がやつてこそ清新の氣に充ち有意義であるが、他人が模倣したのでは薩張みられたものでない、模倣者はどこ迄も模倣者で、決して創意者以上に擻る事は出來ない、併しまだ龜岡式の模倣はいゝが、若しこの熊野式を模倣したら最後で、到底助からぬと覺悟せねばならぬ。

熊野式細部に就ては、第二十四圖に臺股及第二十八圖に木鼻の一を掲げておいたから、これと合せて五つになる。此珍奇な細部をもつた建物は、惜しい事に昨年十一月九日の火事で、本殿拜殿共全部焼失して了つた、だから再び實物をみる事は出來ぬのである。此神社は明治になつてからも、何度か他の神社と合併しやうと試みたが、いつも

何か故障が出来て目的を達せず、其まゝになつてゐたのに今度は綺麗薩張と灰になつて了つた。私の寫生は十二年も以前ので、今になつて考へてみると頗る不完全であるから、いつか高知へ行く折があつたら補寫しやうと思つてゐたのに、永久に出来ぬ事になつてしまつた。

墓股や木鼻に就いてかいた時は、此神社を江戸時代に入れておいたが、江戸時代なら極く初期である、寧ろ桃山末とした方がいゝかも知れぬと思ふ、桃山と江戸の境位のところであらう。

第十八 破 風

破風とは屋根の大棟が、夫に直角なる垂直面で切斷された場合に出来る三角形のところへ、合掌形についてゐる板のことで、破風板ともいふ。昔しは「博風」とも「薄風」ともかいた。大日本古文書第五、天平寶字五・六年頃の「山作所告朔解」等のみ

ると、大概この古い字が用ひてある(同書第一一九・一六九・一七二・一七七)。「和漢三才圖繪」には「搏風」の字を用ひ、「按搏風棟端向表處云云」としてある。

破風は元來、棟木や桁の鼻を隠すために飾りにつけたもので、分類してみると左の通りである。

(一)、形状より

(イ) 照破風、下へ反つてゐるもの(Concave)。寺や宮の屋根に多い。

(ロ) 流破風。棟から軒先迄の長さが、左右同じでないもの、これは流造(ナガレツクリ)(例へば京都なら加茂)といふ様式の神社の妻をみれば分る。

(ハ) 起破風。(イ)や(ロ)と反對に上に反つてゐるもの(Convex)。中流以上の住宅に多い。

(ニ) 唐破風。下の方が照り、上の方が起つてゐるもの。

(二) 位置より

(ホ) 切破風。切妻にあるもので、一に切妻破風

といふ。(ロ)に記した流破風に常に切妻にある、即ち左右流れの異なる切破風である。

(ヘ) 入母屋破風。四注屋根(Hip roof)へ切妻屋根(Gable roof)をのせると、兩方に三角形のところが出来、斯様なのを入母屋造といふ、其三角のところにある破風。これにもまた照りと起りとある。

(ト) 千鳥破風。『日本建築辭彙』・『日本百科大辭典』は共に「三角形即ち千鳥をなす故に名づけたる」ものであらうとの説である、そして尙ほ流れの裝飾についてゐる「据破風」及「入母屋破風の併稱」とある。

併し私は、今日迄流れに三角形をして裝飾についてゐるものゝ稱呼であるを心得てゐた。入母屋にある破風は、千鳥破風といはずと入母屋破風といった方がよく分る、どつちも千鳥破風といつては流れのか妻の

か明らかでない。尤も『日本建築字彙』の「ちどりはふ」のところには、流れに三角影をなしてついてゐる破風の圖が出てゐる。

私は念の爲め實地を長い間やつてゐる二の老練家にきいてみたが、何れも私の解釋の様に思つてゐるとの事であつた、夫れで兎も角此所には「流れにある三角形の破風」の事としておく。

(チ) 絶破風。主屋の軒先から出て片流のもの。

例へば向拜の兩側の破風の様なもの。

(リ) 軒唐破風。軒先から出てゐる唐破風。

大昔にありては、破風は反りなしの直線形であつた。今日のは反りがあるが、當時の出雲大社は家根に反りなく従て破風には反りがなかつた、住吉造(鎌津住吉神社)や神明造(伊勢大廟熱田神宮)の社殿は今日でも反つて居らぬ、これが始まりの形で夫れを忠實を數千年間踏襲し來つたのである。然るに餘り眞直で

は、しやちこ張つてゐて、面白くもなく美的でもない。其内佛敎渡來につれ、寺院建築も一所に輸入せられた、ところが其破風は反つてゐて大分に我國在來のより工合がいゝ、即ちその眞似をやり出したのであらう。そこで總ての破風は反り出したのであらう。たゞ前記の通り僅に住吉造と神明造と丈けが、今日迄頑張通したのであらう。

當初の破風は何處にも残つて居らぬから、單に想像丈けであるが、恐らくたゞ一平面の板であつたらう。佛敎渡來後の上等品は「拜み」(左右の破風がたごに金銅透彫の飾金具、左右の中頃に金銅蓮花形の夫れを打つて裝飾したのではあるまいか)——現在の法隆寺、金堂破風參照、いづれ妻飾を説明する時に此金堂の想像復原圖を掲げるつもりである——と思はれる。尤も玉蟲厨子には勿論古い破風がついてゐる、あれは工藝品だから破風一面に金銅透彫の飾金具で覆ふてあるが、金堂の様なほん

どの建築には、こんな事はしなかつたし、又出來もしなかつたらうと思ふ。

以下各時代に於ける破風の研究をしてみるが、當初のものが残つてゐると考へられるのは平安時代からであるから、其以前のは想像で卑見を述べた丈けである。

飛鳥時代、後世の破風は上から下迄同じ巾ではない、上が廣くて下で狭いのが普通である。飛鳥時代のもさうであつたかどうか。玉蟲厨子のは總て同じ巾であるが、あれは實例にならぬ。そこで金堂の當初のはごんなであつたらうかと考へてみると、よく判らぬが、今ある「拜み」の飾金具は、今の眼でみると頗る無骨な施工ではあるが、當時の意匠をよく發揮した唐草の透彫がついてゐる、さうすると、若し破風が上から下迄同じ巾であつたら、廣過ぎる許りでなく締りもなくなり、妻の格好は甚だ不満足であつたに違ひない。建物全

體としても細部丈けみても、あれ丈け手際よく取扱つた金堂の建築家が、そんなぬかりをしてゐる筈はない、必ずや破風も亦見場よく合理的に意匠したに違ひない。さう考へると、當時の破風も上に増しがあり、表面に何の線形もない反つた板であつたらしい、そして「拜み」には透彫の、破風の中頃には金銅單瓣の——瓣は當時の瓦の夫れの如く比較的細長な——飾金具を打ち、懸魚は中央に一つ丈けであつたらう。

奈良時代、では、重要な建築は多く四注であつた、であるから破風も餘り發達しなかつたと思はれる、併し此時代に於ける建築の發達から考察すると、破風の表面に其全長に沿ひ、簡単な線形即ち「眉」を刻んだのであらう。そして懸魚は中央には勿論、大きな破風に於いては「降懸魚」もあつたらうと考へられる丈けで、實例は現存しない。

平安時代、の前期も右同斷と考へる。後期にな

ると初めて遺物がある、即ち鳳凰堂中堂正面庇の「絶」である(圖・四十七)これで見ると眉の位置は總巾一尺一寸に對し、下端から二寸一分七五のところ即ち總巾の至弱のところから始る。眉の線形のよく分る様に大きく描いておいたから、其形等は圖をよく觀て會得せられ度い。兎に角幸ひに古いのが残つてゐたので、此時代の形が分るのである。

鎌倉時代、になると、前時代迄に引かへ遺物は可なり澤山あるから、第四十七圖の⑤・⑥・⑦及第五十圖⑧に四つ丈け掲げておいた。照破風や起破風は、凹か凸かに反つてゐる丈けで大して變化もないから、専門家でないと一寸判斷しにくい、併し唐破風の方は其形が各時代で随分に異り、割合に判り易いから、重に其方の例を示したのである。

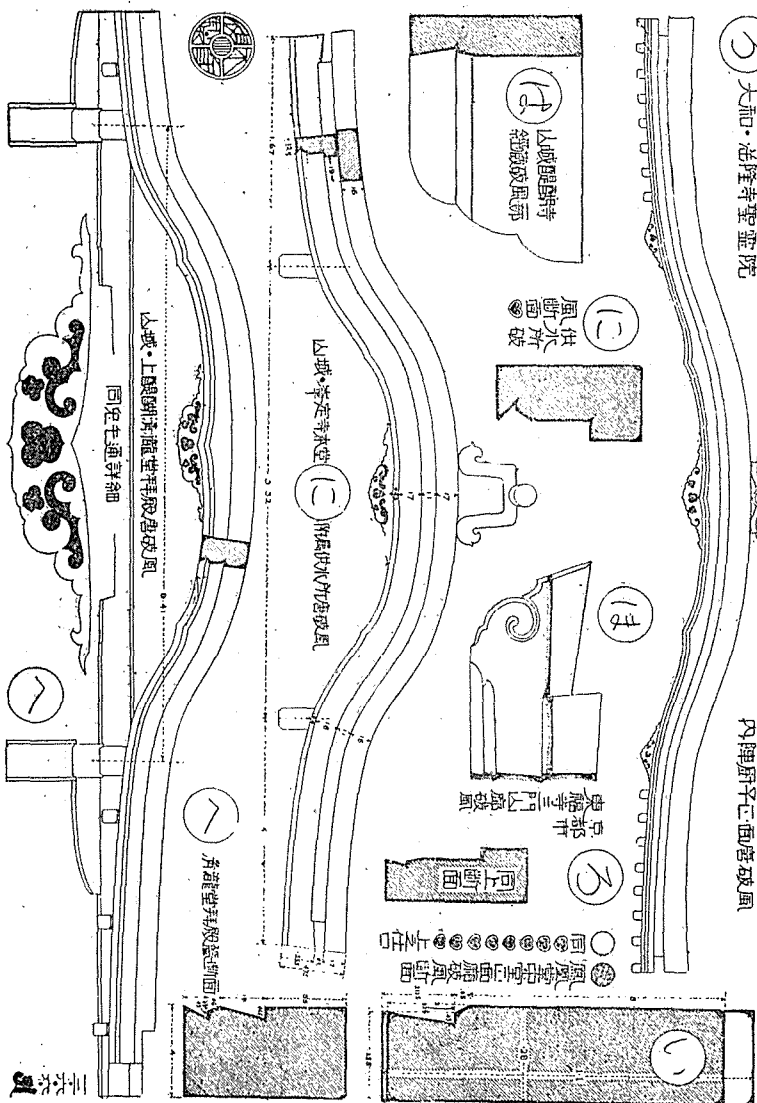
第四十七圖に於いて、⑧は最も古い唐破の一である、これは聖靈院内陣厨子の夫れで、曲率は大

第卅七圖 破風六種

平窓 鎌倉 空母屋代

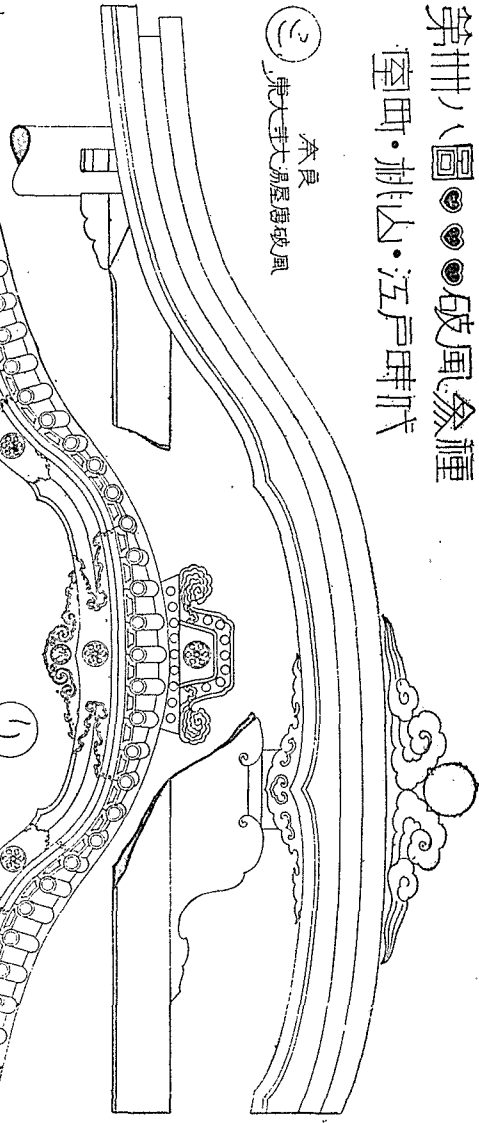
③ 大和・法隆寺聖霊院

内陣扉平窓面窓破風

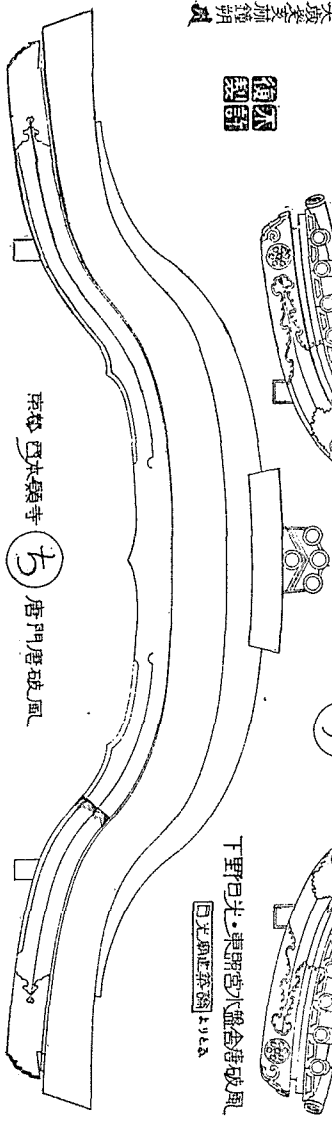


築州八圖 破風三種
 窪町・朴山・江戸時代

② 本良
 東大寺七湯屋傳破風



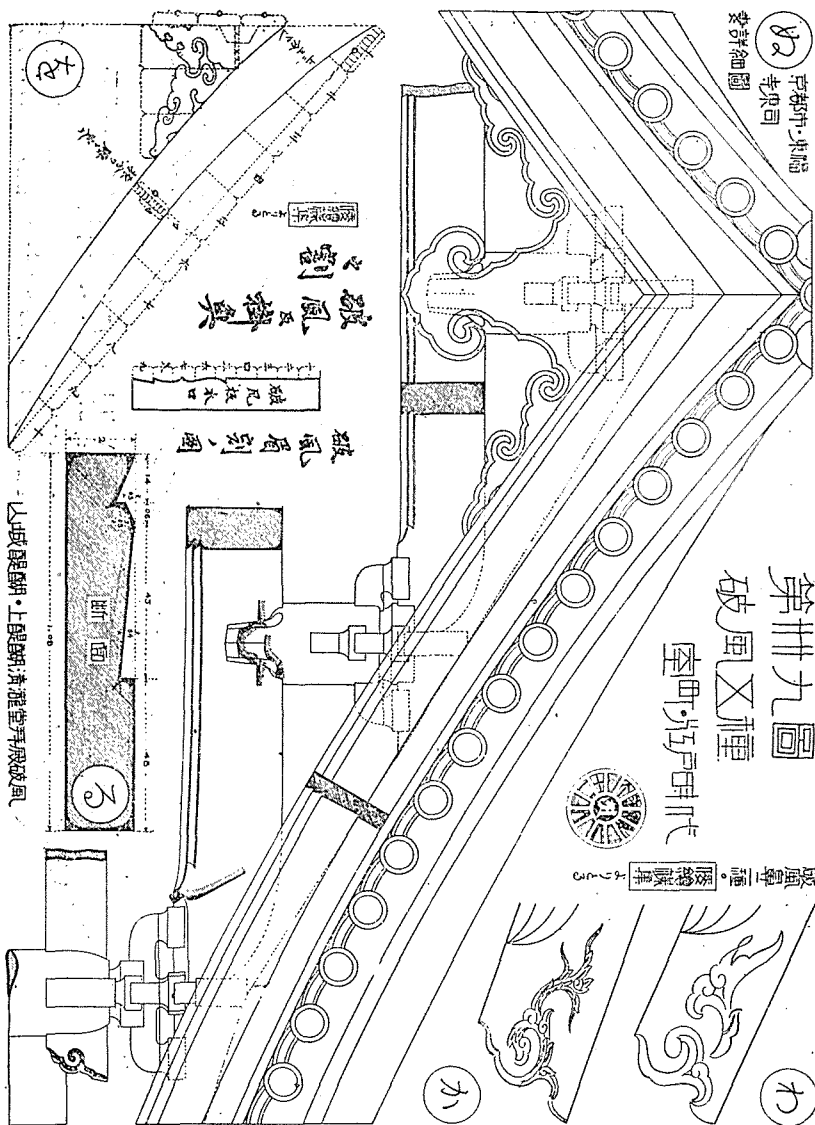
大塚寺麻築頂



下野日光・東照宮八幡倉傳破風
 日光正祭圖より

東京 西本願寺
 ⑤ 唐門傳破風

② 京都市・東福寺
老衆司
装飾細圖



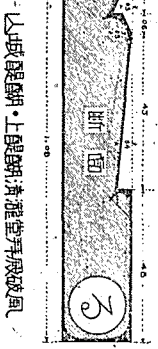
第卅九圖
破風区種
空吻・片戸咄代



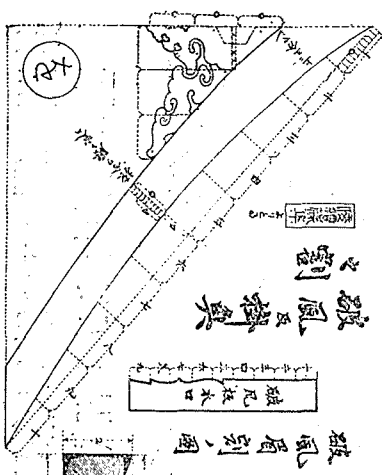
阪谷學禮・櫻繪歌集
一九一九年

③

④



山崎聖廟・上院廟・京都堂拜殿破風



⑤

破風区種
之割
破風区種

破風区種
破風区種

破風区種
破風区種

きく悠然と充分に兩方に延び甚だ安定である、聖靈院は確かに判らぬが、鎌倉時代に建てられた様である、此厨子も唐破風も堂と同時であるから、恐らく現存せる最古の唐破風の一例、事が出來る、其断面は㊦の左方に示してあるが、㊦と異なるところは上から位のところ、深いきりかきがある事である。唐破風は皆かうである。

㊦は何度か引合ひに出した天竺様建築たる上醍醐經藏の内にある經室の破風で、破風尻即ち遊離端丈けを掲げたが、こゝに此時代の木鼻の夫れに似た線形がある、此れが大に注意を要するので、木鼻や墓股の發達と同じく、かゝる簡単な線形が決して馬鹿にならぬ、即ち第四十七圖㊦・㊧は勿論第四十八㊨・㊩、第四十九圖㊪・㊫等の破風尻の線形は、これが段々に發達したのである。

第六卷第一號、第三十八圖の㊬に、室生寺灌頂堂の破風を出しておいたが、あれは勿論堂と同時

代のもので、鎌倉時代破風としては、懸魚迄揃つて居り、標本である。

㊬に峰定寺ミツサだて本堂附屬供水所の破風がある、其断面をみると甚だ㊦に似てゐるが、下の方の切込み深く顎が割合に澤山出てゐる事に氣がつてが、其格好は非常によろしい、此は貞和の建築、歴史上からは南北朝時代であるが、建築史上からは鎌倉としても、室町としても、乃至鎌倉から室町への過渡時代としても、どれも宜しい。第一回の時斷つた通り、私は南北朝の合同迄を鎌倉時代としておいたから、これは鎌倉である。第五十圖の㊭亦然り、これは本堂内陣の中央に安置せる妻入厨子の入母屋の破風である。

室町時代。第四十七圖に於いては㊮・㊯が此時代に屬する、㊮は其初期であるが、破風尻の線形及び其彫刻の發達は木鼻のと同程度である。㊯は寺傳によると永享六年の建築であるさうだが、此

拜殿は元來地形の關係上神殿に面した方からは入れぬ、向て右手から入るので、神殿に對して側面が拜殿の正面になつてゐる。

此建物は正面三間側面七間、入母屋妻入總素木造で四方に椽を廻らし、各部の木割は割に細く、總てが輕快で屋根は檜皮葺、正面中央の間には、少しの澱みもなく滑かな曲線で、心行く迄に左右に延びた軒唐破風(即ち)があり、中の間は兩開板扉を釣込み、脇の間は白壁だが、向て左の間の上方には、三間に區割した横連子の窓がついてある、そして妻飾は狐格子(出)で、唐破風上と大棟とに獅子口(第四十七圖)の破風(破風)が用ひてある、故に此建物に面する時は、恰も名家の筆に成つた室町時代の繪卷物を見てゐると同じである。場所は決して遠くはないから、京都在住の人は是非一度は往つて觀なければ申譯のない位な、何とも言へぬ氣持のいゝ建築である。であるから其一部をなせる軒

唐破風も亦、此種の最傑作の一つである。其入母屋照破風の斷面は第四十九圖(五)にある。

同じく第四十九圖(六)には、東福寺東司(これは同永の建築)の妻の詳細を出しておいた、これは切破風で、拜みに近づくに従ひ破風に増しのつく工合も判るし、破風や虹梁等の斷面も出してあるから熟覽せられ度い。

次は(七)の東大寺大湯屋ので、脚は左程に延びて居らぬが、格好頗るよろしく捨て難いところがある、等五十一圖(八)は、康正の建築である藏王堂内厨子の照破風の一部で、斷面をみると第四十七圖の(九)・(十)等に能く似てゐる。

桃山時代。第四十八圖(十一)が(これも獅子口)は、其形決して悪いことはないが、全體として古代のに比し大分に彎曲したのは事實である、夫れが江戸時代になると、例へば同圖(十二)の如きで、中央の凸部が兩方の凹部から壓迫された様に見える

る、換言すれば中央に荷がかゝると、其重量で中央部が垂下し、脚は兩方に開いて第四十七圖の諸例の様になりはしないか、といふ様な氣がする。即ち中央へかゝつた重量で、尻が兩方へ迂りさうに思はれる。

斯様に時代が新しくなるに従ひ、唐破風は漸く不安定に、其彎曲は漸く深くなり、明治・大正に至り益々甚しくなつたのである。

各時代による形の變化を順々に見てゐては、馴れぬ間は中々判りにくい、併し間を抜いて初めと終り、例へば③と①と比べれば、誰れにも違ひは判る、斯様にして練習するごちきに判る様になり得るのである。

* * * * *

唐破風に於いては、中央即ち一番高いところ及兩肩のところへ普通尖つた出張をつける、即ち此等の部分は蔓葉線(Cissoid)に似た形になる、此を

「茨」(イバラ)といふ、格好上つけるので其他に意味はない、そして茨のところだけは當然破風板は巾が廣くなる。破風に茨がつけば、其内側にある輪極にも當然茨がつく

唐破風に茨のないのもあるさうだが、私はつい氣がつかなくて實例を挙げかねる、雛形本等にあるまづい圖にも殆んど總て茨はつけてある、これがないのは締りがなくて甚だ工合が悪からう。茨があり、古いには必ず茨附といひ得ると思ふ。

照破風では、上の方の巾を「腰」即ち中央の巾さより廣くする、そうしないと格好のとれぬ事は前にも述べた。そこで江戸時代になると、他の細部と同様に割出し方が決められてゐる。第四十九圖は其一例で、此れによると、振分(フイワケ)を腰と定め、腰の巾さを十等分し、其^二五を「垂み」とし(△印)、上の方の巾さは腰の夫れに三分増し、そし

て腰の巾は、破風の全長の $\frac{1}{10}$ の $\frac{1}{2}$ 、即ち $\frac{1}{20}$ にしてある。

第四十七・八・九の三圖に於いて、㉔・㉕・㉖

㉗・㉘の五斷面を比較してみると、各たゞ一つ々の例ではあるが、各時代にどの位の違ひあるかといふ事が判るであらう。斯くして各時代に渡り比較研究をしないと説明を要せずして誰人にも其時代並に良否を判定し得るのである。

破風面に其全長に沿ひて線形(即ち)をつけるのも單調を破る爲めの一種の裝飾である事勿論であるが、其面へ所々飾金具を打つのも、或は破風全體を飾金具で包み更に飾金具を打つのも、尻に線形をつけるのも、無論可成立派によく見せやうといふに他ならぬ、併し何れの場合にも過ぎたるは及ばざるが如しで、破風全體を飾金具で包み更に其上を飾つたの等は、京都市東本願寺に實例があるが、しつゝ、こゝで重過ぎて始末に悪い、お上り

さんを威壓するには都合がよからうが、美術眼で観ると薩張感心は出來ない。

日光の諸建築に於いてみる様に破風一面に幾何模様を刻し、全體に金箔を置き要所々々に金銅飾金具を打つたのも結果は右同様である。破風等は元來こんな事をすべきでないのである。其形も陽明門や唐門のは、全體としては花頭窓(後)から考へた様な形をしてゐるし、兩方共平の中央には懸魚の様なものがついてゐるが、妻にはないから意匠上より観ると頗る珍らしく、眞に前人未發であるが、形の上からいふと遺憾ながら不満足なものである、殊に此等の妻の破風は見なれぬせいもあるが、どうも感服出來かねる、就中唐門の間が狭いの**に**強いて正面のと同じ高さにしたせいか、深過ぎて全く始末に悪い。

尻につける線形——勿論つけるとは限らぬ、つける場合のことを言ふのである——も、初めのう

ちはいゝが、後世になるにつれて無暗に飾をつける様になつたのである、参考のため㊦・㊧に雛形本から轉寫しておいた。

第十九 懸 魚

懸魚は掛魚ともかき「ゲギョ」と發音する。破風につきもので、往昔より現今に至る迄破風の拜みに殆んど必ず下つてゐる、勿論構造上には此亦必要缺くべからざるものではなく、單に裝飾であるが、無いと格好がとれない。『和漢三才圖繪』には第五十圖㊨・第五十一圖㊩の様な圖を描き

按懸魚作魚尾形以隱棟桁端水物防火之意乎後異製作花形有數品近頃禁民家置之但以簡易者置之呼曰桁端懸耳

とある、此事に就てはまた後に一言するが、兎に角懸魚といふのは其中央に下つてゐる木片のことで、其兩方に飾のある場合には、其飾を「鰭ヒレ」といふ。昔しには鰭はなかつたらう。鰭は鎌倉時代

以降であらう。第四十九圖㊪・五十圖㊫・五十一圖五十二圖等に鰭附のがかいてある。

破風が割合に小さい時は中央の一つ下つてゐる丈けだが、少し大きくなると桁のところへも下げる、だから合計三つある、其桁のところへ下げてあるのを「桁隠ケタカシ」「桁隠懸魚」又は「降懸魚ケダリ」と呼び、中央の「懸魚」と區別する。これは唐破風でも同斷であるが、此場合には中央のを一に「兎毛通ウサゲトホシ」又は「兎毛通懸魚」ともいふ、そして若し兩方にも小さいのがあつた時には、「桁隠」といふ丈けで「降」とは言はぬ。第四十七圖㊬には兎毛通と桁隠とあるが、㊭・㊮・四十八圖㊯・㊰は兎毛通丈けである。

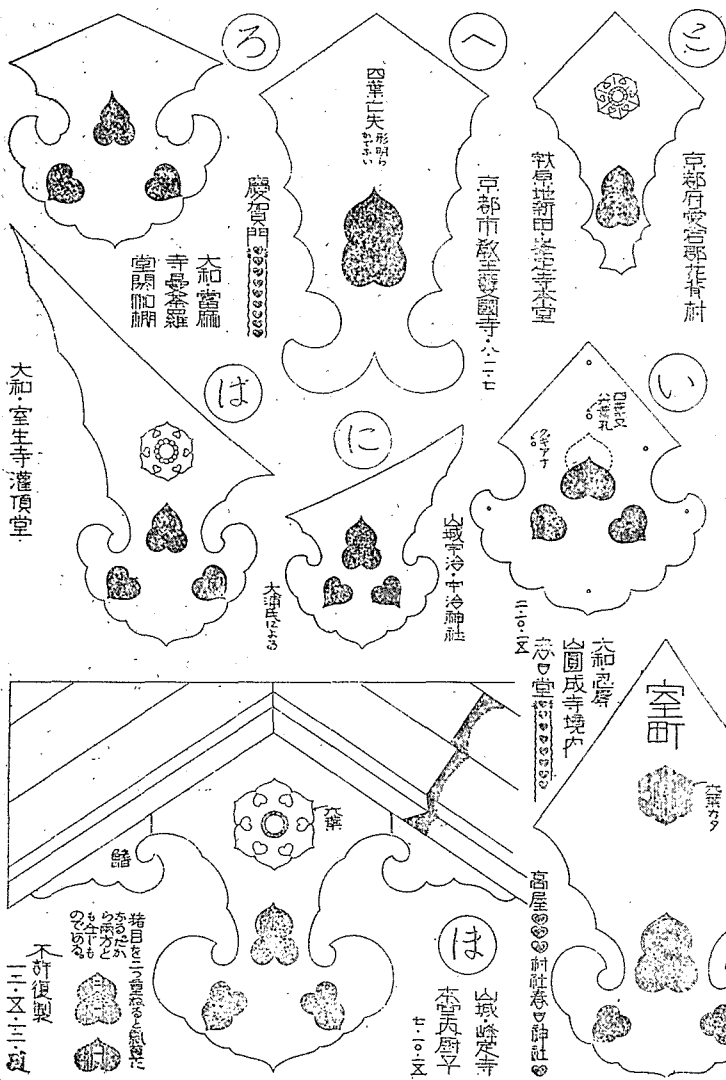
例により分類をする

- (イ) 切懸魚キリ。六角形で破風に接せざる四邊が直線より成れるもの(第五十二圖㊱)
- (ロ) 梅鉢懸魚ウメバチ。同曲線より成れるもの(同)。
- (ハ) 貝形カヒカタ(又は貝頭カヒシラ)懸魚 (同)。

第八十圖 懸魚其壹 鎌倉時代

三六六

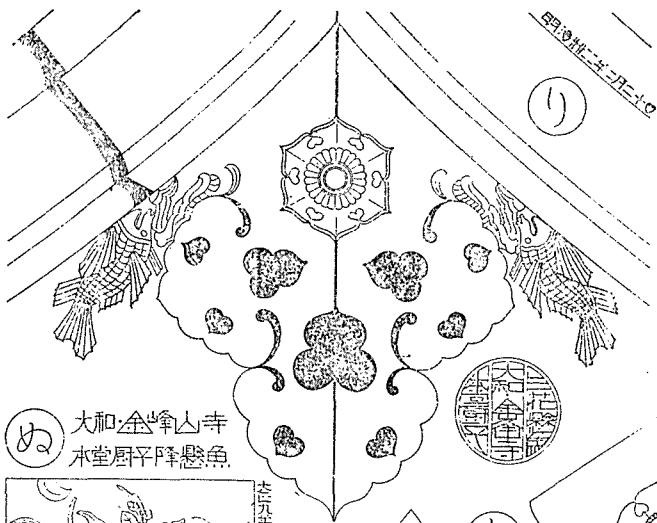
京都市船場川邊相大寺



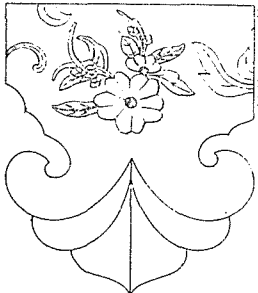
不詳複製 三三三三三

第五十圖 懸魚 其貳

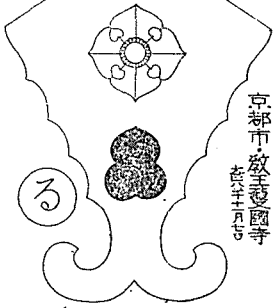
室町時代



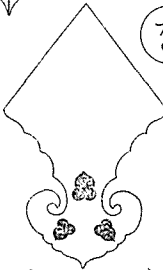
大和全峰山寺
水堂厨平降懸魚



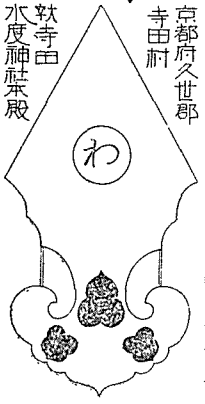
大河内船村大凸神社本殿



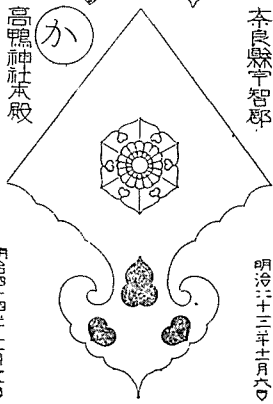
京都市教王護国寺
慈母堂



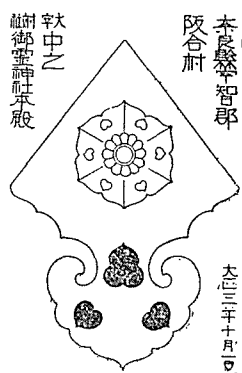
京都府船井郡西本杖
本良懸宇智郡



鞆寺田
水度神社本殿



高鴨神社本殿
京都府久世郡
寺田村



本良懸宇智郡
阪合村

不許複製・二・三・八・二・三・四

大正三年十月日

明治二十三年十月日

明治十四年十月日

(ニ) 雁股懸魚カシラ 同。
(ホ) 結綿懸魚ヒモワタ。(同)。

以上五種第五十二圖の右下に纏めてかいてある、梅鉢懸魚では同圖⑥のが一寸古い。平治物語繪卷には、建造物の桁が圓く、板幕股をおき、破風には十一の懸魚(拜みに一つ、あさは左に「降」が五つづ、右に「降」が五つづ)の下つてゐる繪が描いてある、餘り多過るからこれは繪空事である。其他大概の繪卷物には建造物の繪がある、だから大概破風と懸魚との繪がある。併し此等の繪卷にある建造物は、屋根迄かいてあるのは多く門であるからか、或は描くのが手數なので簡單にしたのか、大概切懸魚か梅鉢懸魚がかいてある。

(ハ) 蓄懸魚カクラ。(第五十一圖②・五十二圖①・五十四圖③・④)。

(ト) 猪目懸魚イソメ。心臟形又は瓢箪形の凹所又は空所を其面に有するもの。例多し、例へば第五十圖のは全部さうである。

(チ) 三花懸魚ミツハナ。(第五十一圖・五十四圖⑤)の様なもの。

(リ) 二重懸魚。(ハ)・(ニ)・(ホ)・(ヘ)等と同じく割合に新しいもの、圖示しなかつたが形は決してよくない。

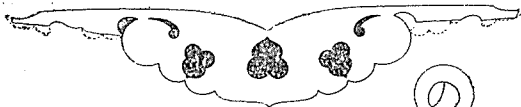
大體この位で、細かく分けたらまだ出來やう。

右の内、猪目懸魚が最も古く且つ最も普通である、其他鰭がついてゐる時、其鰭が雲形・浪形・若葉形等であるにより、夫れく雲懸魚・浪懸魚・若葉懸魚と呼ぶので、此場合は懸魚の本體は問題にしない、夫れから新しくなると、懸魚其物が龍であつたり、飛んでゐる鶴であつたり、草花であつたりする場合もある。

第五十圖以下五枚の圖版は、懸魚のみ數十種かいておいたから、少し注意して研究すると、木鼻や幕股と同じく、時代の變遷に伴ふ様式の變化が可なり多いから、誰人にも容易に時代の鑑別をす

第十八參圖 懸魚 其四 鎌倉

室町時代



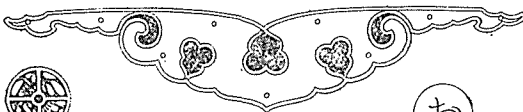
滋隆寺聖靈院厨平兔の毛通

の



同新隱

く



同上飾金具

お



同飾金具

や



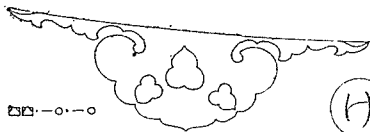
ま

大和忍辱山・圓成寺境内殿鳩神社史の毛通

え

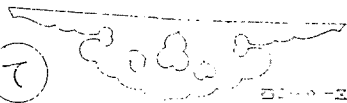


奈良縣生駒郡富雄村大宰中・村社六所神社福社及神社新隱

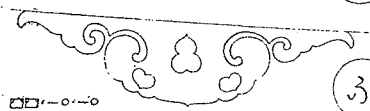


け

て



大和忍辱山・圓成寺境内奈の室新隱



ふ

大加・滋隆寺聖靈院向拜新隱二種

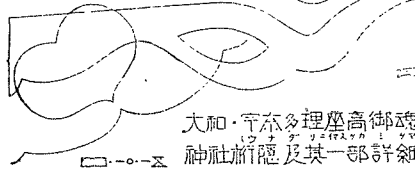
あ



山城宇治・宇治神社和隱(十朝泉園)



た



大和・宇奈多埋座高御魂神社新隱及其一部詳細

さ



山城水尾神社本殿新隱

第八十肆圖・懸魚菱・室町桃山江戸時代

料二・一・一・三〇

大和多武峰・談山神社懸魚



き

料四・二・一・七

大和國宇智郡宇智村幸鷗神社・縣社高鷗神社



ゆ

料三・一・〇・六

同上桁隠



め

料三・一・〇・六

同上木殿内厨子



し

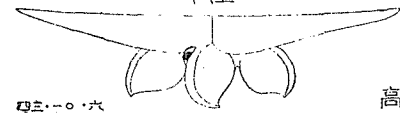
料二・一・一・七

同上桁隠



料二・一・一・七

同上



料三・一・〇・六



ひ

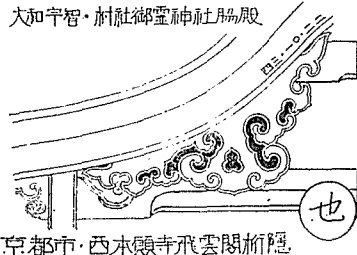
奈良縣磯城郡交倍村幸阿部神社・白山神社木殿



も

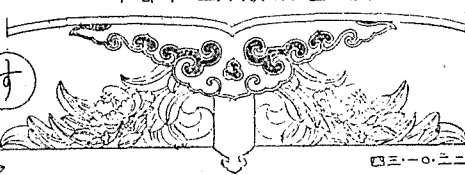
料三・一・〇・一

大和宇智・村社御堂神社木殿



也

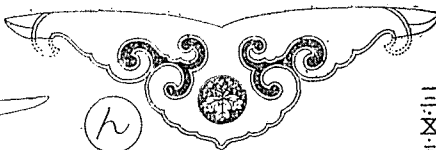
京都市・西木願寺飛雲閣桁隠



す

料三・一・〇・二

同上兜の毛通



ん

料三・一・〇・三

高知縣高知市・縣社朝倉神社木殿

料二・一・一・三〇

る事が出来るのである。爲念書き添へるが、此五枚の圖には、便宜普通の形のを初めの三枚へ、唐破風等のを後の二枚へ凡そ年代順に描いたのであるから、其積りで覽られ度い。

現今我國の建造物に残存せる最古の標本は、其様式上鎌倉時代と推定さるゝので、夫れより古いのは残つて居らぬらしい。奈良市新薬師寺本堂

(天平十
七年?)の入母屋の破風に下つてゐるのは、可なり

古い様であるが、鎌倉ではないかと豫てから考へてゐる、尤も屋根迄登つてそばで觀た事はないが摺本はもつてゐるから、これを書くとき其摺本を出してみて考へたが、どうもいつ頃のものか判断せぬ、だから豫ての通り鎌倉にしておく。

何にしても、此れは薄い木を外擺線と内擺線との集りの様な一種の形に刻み、其上表面に心臓型や瓢箪型の孔を明け、若しくは深く鑿り凹め、そして而も高い最も風雨に曝される所へ下げておく

のだから、永く保たぬのは當然である。破風すら平安以前のは残つて居らぬ、懸魚の鎌倉以前のが亡いのは當然である。故に飛鳥・奈良・平安三時代の懸魚は、破風と同じく想像する丈けで、遺物から適確に斷言する事が出来ぬのである。

併し乍ら、飛鳥時代に懸魚のあつた丈けは動かぬ、夫れは例の天壽國曼荼羅の鏤樓をみても判るのだから、有無は問題にならぬが形が判らないのである。そこで其形を考へてみると、あの時代の模様は蓮・寶相花・忍冬が重に用ひられた、だから先づ大體の輪廓は後世のものど大差なく、たゞ夫れが便化した忍冬より成り、猪目は先づ中央の一つで、上部の平たい空地に裝飾として、金銅の六瓣花(法隆寺金堂内釋迦脇侍藥王藥上菩薩寶冠にある如き)又は八瓣花(同觀音世菩薩の如き)、即ち後世の六葉に相當するもの——今の法隆寺金堂懸魚に於いてみる如き——を打つたのであらうと思はれる。

次の奈良時代は前にも書いた通り、大して破風を用ゆる折もなかつたらしい、破風がなくば懸魚はないので、其進歩發達は彼此常に併行してゐるのである、であるから、此れも平安後期へ來て大分にいゝ形になつたであらう。併し墓肢と同じくほんどうのいゝ形は鎌倉時代へ入つてからであつたらう。

斯様な次第であるから、懸魚に關しては、鎌倉以降現今に至る迄のを圖示し、變遷を説明し形を批評するに止るのである。

鎌倉時代。第四十七圖③・第五十圖④——⑤及第五十三圖①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧の十七圖に就てみると、②を除いた残り全部は所謂「猪目懸魚」である、兎毛通を別として第五十圖の丈けでは、全部が擺線の曲線より成つて居り、稀に②の如く最上部に抑揚ある線が用ひてある、そして普通一般に上部瓢箪型の上適當なところに、四葉

五葉・六葉等をつける、此は木製の場合と金屬製の場合とある、此六葉も勿論時代によつて大分に形は異なるが、今は措き後に飾金具を記す時木製のも金屬製のも一所にまごめて書く事にする。

第五十圖の④は、春日堂の懸魚の裝飾の爲めに其表面へ打つた飾金具である。此堂は私は今でも鎌倉初期と推定してゐる。此は小さいが此と並び建てる白山堂(其墓股は二十二)と共に、宇治上神社本殿に亞ぐ古い建物である。今此飾金具をみるに猪目は少し中央に寄り過ぎてゐるが、其輪廓は中々よろしい、殊に面白いのは中央の猪目で、上の方が點線の如く膨むと所謂「瓢箪」になる、恐らくこれは現存の最古式の懸魚ではあるまいか。

次に古いのは⑤で、寛元元年に出來た(須彌壇が)當麻寺曼荼羅堂の後側に附屬してゐる闕伽棚のである、此では最早中央のが瓢箪になつてゐる、此は小さくて六葉を打つ場所がない、それたのでな

くて初めからないのである。(④)は稀にみるいゝ形急勾配のところにつけた降懸魚としては、格好に於いて先づ申分はない。(⑤)は右上に抑揚のある曲線が用ひてある例、斯様な線を上部に用ゆるは、重に室町時代以降で、鎌倉では少ない様に心得てゐる。

(⑥)・(⑦)は異形の例に擧げておいた。(⑥)では下部が二つに割れてゐる、こゝに於いて初めて「魚尾の形を作つて以て棟桁の端を隠す水物火を防ぐの意か」といふ『三才圖繪』の説の出所が判つたのである、うまく考へたのであるが、其實懸魚の下の方がとれて了つて、一番上の兩方へ巻き上つた部分丈けが残つた形である、一寸みると非常に變つてゐる様であるが、能く観ると據は明かである。

此繪丈け見てゐるといゝや、に長い様であるが、慶賀門に下つてゐるところは決して間が抜けてはゐない、のみならず立派に裝飾になつてゐる。序に斷

つておくが、蓮花門にも斯様なのがついてゐる、併しあれは五六年前大修繕の砌、慶賀門のをみて眞似したのである、だからあれは様式は鎌倉だが材料及び製作は極く新しいのである。(⑧)は峰定寺本堂の屋根裏から發見したもの、全然下部の裝飾を缺いてゐるから、つまり魚なら尾が切れて了つたのだ、火伏の禁厭になるかどうか、此れでは請合はれぬが、形としては珍らしい、併し整つてゐない、六葉のつけ方もぞんざいで曲つてゐる、懸魚其物もいゝ加減に造つたのである。此二つは違例として別扱にすべきである。

(⑨)は鰭のある例、此時代に鰭があるのは此亦珍らしい。鎌倉時代に於いて木鼻が發達した事は既に第五卷第四號に述べた、即ち第二十六圖——殊に其上部十數種——の原始木鼻の何れか、(⑩)・(⑪)等の兩側についたとしたら、即ち(⑬)になる、これ位の事を考へ出せぬ事はないのみならず、考へ

出すのは當然の順序である、扱てかうしてみると
鰭のないのより大分賑かである、誰か當時頭のい
ゝ建築家が考へて施工した、そこで夫れが新工風
といふので評判になり皆眞似を شدした、かくし
て鰭が発達したのであらう。かう考へると此の山
城の山奥にある現代と没交渉の寺が、頗る興味あ
るものになつて来る。

次に唐破風と絶破風のをみると、第五十三圖の
②と①とであるが、其形状甚だ完好、併し措しい
事に江戸時代になつて多少の手入をした、即ち光
らして立派に見せるつもりで、其面に金銅飾金具
を打つて、いゝ形を隠して了つた、⑫・⑬は即ち
此金具である。鎌倉と江戸とで様式にどれ位の差
があるか、比べてみれば説明の必要はあるまい。

絶のでは⑭が傑出してゐる、これ丈けいゝ形は
めつたにない。⑰・⑱は平凡、殊に⑱は頗る物足
らぬ。變つてゐるのは⑲で橘唐草である、第五十二

圖⑲の様な懸魚は、江戸時代になつて墮落の結果
出來たのではあらうが、其源は遠く鎌倉時代に發

してゐるのであらう
(第六卷第一號第一四八頁
上段終より六・七行参照)

室町時代。第四十七圖⑲・⑳、第四十八圖㉑、
第四十九圖㉒、第五十圖㉓、第五十一圖全部、第
五十三圖㉔・㉕・㉖、第五十四圖㉗——㉘の二十
四は何れも此時代に屬するものである。

右の内第四十九圖の㉒は、周圍に輪廓があり、
鰭も同じ様な線形を二つ繰返してゐるのは能がな
い様に見ゑるが、これは第五十圖㉓から來た形で
ある、㉔の鰭をもう少し巻き込み、二つ繰返すと
これが出来る、建造物の年代も其順序になつてゐ
る。夫れから周圍に輪廓をとるのは、後世には澤
山あるが鎌倉には見當らぬ様である、してみると
斯様な細工を شدしたのは此時代からかも知れな
い。

第五十一圖㉑は最も珍らしい例である。此れが

「^{ニッパナ}三花懸魚」であるところをみると、此種の懸魚は此時代から出來たのであらう。も一つは其鰭で、

眞の魚形がまる彫をしてつけてある。厨子は切妻造で懸魚は東側と西側にあり、從て其鰭をなし、てゐる魚は四尾なるが、四つのうち西側の向て左のが一番形がよく、且つ其鰭の出る附近の彫刻も皆多少の相違があるが、大した事ではないから圖に向て左の、一番いゝ形をとつて右側へもつけておいた、だから實物とは多少の差がある、だから諸君子が實地を視察されたとき、此圖と現物との相違を咎め給はざらん事を希ふのである。

扱て前に記した「三才圖繪」の説の、懸魚を魚尾の形に作つたのは、火防の禁厭らしいといふのは果してそこ迄考へたのかどうか、恐らく著者の憶説であらうと思はれるが、今の場合、水と離るべからざる關係のある魚を其儘鰭に用ひたのは、これこそ「水物防火意」であらう、何れにしても面白

い例で、私の様な古色蒼然黨の間には甚だ有名なのである。

㊦は所謂蓄懸魚^{カブラ}。かゝる形も前時代にはなかつたのである。普通四葉又は六葉をつける所へ、櫻の花と葉と蕾とをつけたのは珍である、恐らく他に類例はあるまい。

木鼻や墓股と同じく、前時代迄は眞面目であつたのが、室町へ來ると漸く技巧を弄したのである、斯様に發達をして來たが、これ懸墮落の第一歩である。

㊧も亦魚尾式、併し時代が一つ下る丈けに形は第五十圖㊨よりおちる、大瓢箪の上には四葉がつけてある。此形は同圖㊩の中央の部分がどれて了つたと思へばいゝ、此時代になると蓄懸魚がある丈けに、此種の懸魚の出來る順序を考へ易いのである。

㊢・㊣・㊤の四つは、何れも此時代として

は形大によろしく、何れも傑作揃ひである、此内注意すべきは㉔で、六葉のせいが高い、下から見た時つぶれて見ぬ様修正をしたつもりであらうと思はれる。此四つに比べると、第五十圖㉕は下の方から押し潰した様で、餘りよくない。

第四十七圖㉔のは、破風を作る時中央から刻み出したので、あとから持つて行つてつけたのではない。破風全體を一本から刻み出す以上、兎毛通を残すのは材料には關係がないが、取扱が厄介だから、別に彫刻してあとからつけるよりは面倒なわけである。當代にはかゝる刻み出しは間々見受る所である。同圖㉔のは、後からつけたのだが、中空である、上端即ち破風に接する方へ大孔をあけて、内容を穿り出して空洞にしてあるから、多少早く腐朽する虞はあるかも知らぬが、此の例の様種々の形に穿孔した場合に、肉が薄いから内が黒く且つ輕快に見立、其輪廓は非常に明瞭であ

る、故に手數かけた丈けの効果は充分にある。

第五十三圖に於いて、㉖・㉗・㉘の三を比べてみると、㉖が一番形がよく、あとの二つは餘り押し潰されてゐる様である、残りの二つでは㉘の方がよく、㉗が一番まづい。

第五十四圖の桁隠㉙は三花である、猪目も瓢箪もなく、中央に大きな鐵製四葉を打つた丈けで、簡單で大によろしい、甚だいゝ出来である。㉚・

㉛・㉜等では、巴紋や輪寶等を瓢箪の代りにつけたので、大して感服すべき性質のものではない。㉝は番懸魚、中央に下がつてゐる形は敢てまづくはないが、鰭がまづい、なせまづいか第五十圖の多くの例と比べてみると會得出来る。㉞も同じく蓄型であるが、鰭と本體の一部と融合して卷葉の様なものから出来てゐる、油日神社墓股(第十三圖)を思ひ起させるものである、㉟は桃の實の桁隠で、これも大に珍らしい。

桃山時代。先づ第一に擧ぐべきは第五十二圖㉒である。矢張輪廓附蓄懸魚で、其輪廓即ち覆輪(輪廓の断面半圓形の時分に覆輪といふてゐるが(さうでなくとも普通輪廓を「フリリン」といふ。))は鰭に迄及んでゐる。此時代には未だいゝが、この鰭の形がだん／＼に崩れてきて、遂に救濟すべからざる様になつて了ふ。

㉑では下の方に瓢箪丈けで、猪目は上の方に飛び上つて了つた、上方の曲線が下方と同じ様に、外擺線式である爲め、同種の曲線の反覆で結果は不満足である。第五十四圖㉔・㉕も此時代であるが、餘り感心の出來ぬ形である。

第五十二圖㉒は異形懸魚であるが、同圖㉓の傍があり蓄懸魚の出來損ひである、四葉もとれて了つてかたが少し高く残つてゐる丈けで原形は判らぬ、まづ此時代のものであらうか。

江戸時代。初期のもの例へば第五十四圖の㉑・㉒等はまだいゝが、㉓に至つては手がつけられな

い。懸魚の形もこゝ迄墮落したらもう澤山で、此上拙くなりやうはないと思はれるが、事實は中々さうでなくて、落ちる時には加速度づきであるから、随分ひどくなつて了ふ、まづい方の例はそこいらに澤山ある。

第五十四圖㉔は、初期のせいかな形はまだよろしい、これは少し修正するとずつと良くなり得るものである。

* * * * *

次に異形の懸魚に就て一言しておく。㉒は割に古い、これは桃山を降るまいと思はれる。㉑の五つは先に分類のところへ名稱を記したが、其割出し方は小正方形で示してある。此中で右上の梅鉢懸魚と㉒と比べてみると、時代による六葉の位置の變り工合が判る。㉓も桃山であらう。

* * * * *

以上は主として破風板及懸魚に就てのみの説明

であるが、妻飾に就ては他日改めて述べる事にす
る。(大正十二年七月七日稿了)

訂 正

第六卷第三號第一四六頁上段第五行、支輪の説明のうち、「圓くて眞直」を「方形で眞直」し、其次の一句「だからまるで……並べた様である」の二十二字を削る。

理由。私の記憶違ひで、法隆寺金堂天蓋・橋夫人厨子天蓋・海龍王寺五重小塔初重内部の、様に四角な棒であったからである。毎度不注意に原因する誤りが多くて申譯のない事である。

正 誤

頁 段 行 誤

正

一四六 上 七 天蓋のこは

天蓋のもの

下 一 一 分つ大體

先づ大體

一四七 上 一〇 肘木から肘木へ 肘木から肘木へ

一五一 上 四 方が對し

「對し」の二字削除

上 一六 外角

外角

一五五 上 一七 (狭) 面

(狭) 面

紹 介

● 歴史學概論

丹羽 正義著

近時吾國に於てはバーデン學派の歴史哲學の影響をうけて史學理論の領域が大いに開拓され、歴史の本質を闡明せうこの努力が試みられた。本書もかゝる試みの一として現はれたる眞摯の勞作である。史學者たる著者は哲學によつて科學としての歴史の概念を確立し、これに批判的考察を加へ、以て歴史學といふ獨立科學を確立せうと試みた。先づ緒論に於いて近世科學の批判的考察の意義を明らかにし、次に第一部歴史學の批判的確立に於て科學としての歴史に嚴密なる論理的批判を加へてゐる。そのうちの第一章歴史の概念、第二章知識の問題、第三章經驗的實在、第四章經驗科學に於て一般科學の批判的考察によつて歴史の根本たる經驗的實在の意義、歴史の認識の根據を明らかにし、第五章歴史學に於て、歴史は藝術的直觀の作物である、歴史に於て意義あるものは想像に満ちた形式の所産であるとする見解は承認され得ない